

ラオスの 子ども通信



発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスの子ども

今号は「はじめる・つながる・つくりだす」特集。

子どもたちが本と出会うようにとはじめて、
多くの方々に支えられて広くつながって、
子どもたちが大きな未来をつかむ機会をつくりだしています。
ご支援を続けていただいているからこそその成果です。

太鼓でリズムをとりながら詩を朗読(ナンブーン中等学校)

はじめる、つながる、つくりだす

ラオスの小学校に図書を届け、併せて図書室の開設を手助けするところから「ラオスの子ども」は活動を始めました。

でも、開設すれば、みんなが本を読んでくれようになるわけではありません。子どもと本をつなぐのは先生です。

そして先生に働きかけるのはラオス事務所のスタッフたちです。図書、読書の普及にラオス全国の学校をまわって先生方とつながりを深め、互いに成長し、新たな取り組みが試みられ、本に親しむための「居場所」がつくりだされてきたのです。

はじめる

本の楽しさをみんなに

事務局長 野口朝夫

町に書店がなく、学校では図書室はおろか教科書もそろわず、先生も図書に接することもない。そこが活動の出発点でした。子どもたちが本に親しめるように、学校の空き教室を利用して図書室を設け、先生に研修をおこなってきました。教科書を教えることが自分の仕事であり、授業が終われば畑仕事が残っている多くの先生にとって、戸惑いはあったでしょう。

四十余年活動を続け、日本にはないラオスの豊かさ、人々の力強さ、おおらかさを実感してきました。一方で、筋道立てて切り拓く学びや未知の世界へと想いを広げる教育はあまりおこなわれていないように感じてきました。あるいはそれを必要としなかった文化的背景があるのかもしれませんが。

読書の楽しさを先生自身が感じ、子どもの発達には教科書だけではないいろいろな本と親しむことが大切であることを理解してもらおう。それをめざして研修を重ねて実施し、子どもに変化が表れ、先生が変わっていくという道筋を描いてきました。

ネット社会にこそ大切なものを育む

文字に親しむ場が少ないラオスは、豊かな口承文化を持つ社会です。そのことを気づかされた私たちはラオスの人々と民話絵本をつくり、さらに多様な出版を手がけていきました。ラオスに本が増え、本を購入する習慣が生まれて、子どもたちが文字に触れる機会がうみだされるよう努めてきました。

そして今日、インターネットが普及し、ラオスでもスマホを持つ子どもが増えました。SNSで若者は文字を使うようになったと日本でも言われますが、そこで書かれる(打たれる)文は即時的で断片

的なもので、論理的思考を育む活動とは遠い印象です。ネットでの情報収集(検索)も狭い考えに導く懸念も指摘されています。こうした時代だからこそ、多様な視点、考えに触れられる図書室・図書館の役割は大きくなっています。

ラオス事務所のスタッフのバンロップ(上の写真で太鼓をたたく男性)は中等学校時代、当会事務所併設の図書室で絵本に出会いました。現在、ラオス全国の小学校、中等学校で、絵本の楽しさ、勉強での使い方を、自分の言葉として児童・生徒に、先生たちに伝えています。かつて、本の紛失を恐れて締め切られたままにさえなっていた図書室。今では授業での活用法を先生が学び合い、SNSで経験や事例を共有し、刺激しあうまでになりました。図書室ボランティアの生徒たちも活躍しています。中等学校では図書室の利用促進のため、アイデアを出し合いながら魅力的な展示コーナーや目を引く案内板をつくることもはじめました。

さらに地域の人々が自分たちで図書室の床をタイル張りにしたり、壁を塗り替えたりなど、拡がりを見せながら事業が結実しています。目に見える成果が出るまでには長い時間を要し、今なお私たちの取り組みは途上にあります。

図書館開設を支援したサカ中等学校を視察する野口事務局長。生徒たちから、図書館が描かれたお手製のうちわがプレゼントされた



幅広い支援とともに

職場に、各地の工場に広がって

国本加代子さん／積水ハウス株式会社



会社から日本フィランソロピー協会のボランティアウェブの案内があり、在宅でできるラオス語絵本プロジェクトに目がとまりました。絵本を翻訳するというのが楽しそうなのとラオスの子どもたちの育みたいなのが素敵で、最初は個人で、そこから職場の女性5、6人と。他の社員にも「就業時間後にやりませんか」と声をかけたところ、「むかし子どもが読んで家にあるわ」と持ってきてくれたり、自宅でお子さんをつくったり、管理職も参加。会社からのマッチングプログラムの助成も決まりました。

会からラオス語に翻訳したい絵本の募集があつて各地の工場に呼びかけたところ、さらに輪が広がりました。子どもたちが自由に本を手にとることができるようになればと思います。

ラオスの心にひかれて

高瀬稔彦さん

アジアの遺跡が好きであちこち回り、ラオスに行ったのが28年前。そこで当時アジアで頻発していた睡眠薬強盗に遭い、泊まっていたバクセーのホテルの方たちのおかげで九死に一生を得ました。お礼を伝えたく再訪し、併せてラオスにまつわる国際支援に努めて関わるようにし、ラオスのこどもの図書室開設などの支援をしてきました。



近くは、ニュースレターに、ラオス語を貼った絵本が東京の事務所がたくさん寄せられているのでラオスに運んでくれる人を募りますとあったので、私も手を挙げました。ラオス事務所に絵本を届け、スタッフのスイェンさんが出迎えてくれました。私は別のプロジェクトで北部のポンサリー県で寮の支援をしていて、そこに図書室ができたらいいですねと話しました。ニーズのマッチングで、もっともっと普及が進むといいですね。

イベントでの出会いをきっかけに

田島敏子さん



ラオスの子どもたちに絵本をつかって図書室を開く活動を新聞で読み、よこはま国際フェスティバルで、この会を始めたチャントソンさんと知り合ったのがきっかけでした。私も子どもができて絵本を読んであげていて、これはいいことだと共感し、応援するようになりました。「継続は力なり」が私のモットー。以来、毎月続けています。ニュースレターを読むと、着実に絵本をつくり、スタッフも訓練して図書室をちゃんと管理して、充実しているのがわかります。それは平和だからこそできるんですね。この活動を知って良かったなと思っています。ぜひ、活動を続けることを願っています。

先輩からひきついで、本の楽しさ、ラオスにエール

伊藤優希さん／公文国際学園中等部・高等部図書委員会顧問



図書委員は、図書室でおすすめの本のコーナーに「推し!」などと描いたPOPをつくったり、「かわらばん」という本の紹介や新任先生インタビューの新聞をつくって校内に配ります。

秋の表現祭(文化祭)が近づくと、学校のホームページなどでお知らせをして古本を集めます。小説、科学雑誌、漫画などなど集まった本を生徒たちと先生で一冊ずつ値段を決めていき、古本市を開き、収益は全額、ラオスのこどもに寄付しています。

ラオス語絵本プロジェクトにも参加。こぐまちゃんなど懐かしいねと言いながら、ラオス語のシートを貼っていきます。逆に貼ってしまわないように先輩が後輩に、ときには担当になりたての先生に教えながら完成させます。本離れがいわれる昨今ですが、図書委員は本好きが多く、ラオスの子どもたちに、本って楽しいよねというエールを送っています。

だれもが本に親しめる場を

絵本大好き、ねこの本がいちばん

アーノンくん／小学1年生



「ぼくが好きなのはねこの本。ねこがった魚をゆでるところが大好き。楽しくなる。まへは字がよくわからなくて本は好きじゃなかったけど、だんだん字が読めるようになって、いっぱい読んでるよ。ねこの本がとにかく好きなんだ」

ラオス事務所の併設図書室で、こう話してくれたアーノンくん。読んでいたのは「11ぴきのねことへんなねこ」(馬場のぼる作 こぐま社)。ラオス語訳シートを貼って日本から届けた1冊です。

アーノンくんは図書館に来るまで文字(ラオス語)を読めず、話すこともほとんどできませんでした。発するのは携帯の動画で見たアニメの言葉だけ。おばさんが事務所の図書室で絵本を借りて読み聞かせをしてあげたところ、だんだん興味を持つようになりました。いろいろな本に接するうちに今ではきちんとしたラオス語を話すようになり、自分で本を読めるようにもなりました。

みんなに利用してほしいから展示やサインを工夫

ウットさん／サナカム中等学校6年生 図書室ボランティア



「図書室での活動が大好き。図書室運営の基礎研修で講師と一緒にやったスーンは、とっても楽しかった」とハキハキ答えるウットさん。図書室の展示やサインを考える研修に先生たちに交じって参加。グループの代表として発表もしました。スーンは太鼓をたたきながら詩を唱和するラオスの伝統文化。本に親しむ入口として取り入れられたラオスならではの人気の図書活動の一つです。

物語好きとのことで、好きな本は?と聞くと、「チョウチョと王様」と即答。たいいていの生徒は題名がすぐに浮かばなかったり、みんなが知っている有名なラオスの民話をあげたりしますが、それだけ、たくさん読んでいるのでしょう。これは図書室に届いたばかりのアイランドのお話。「これまでに見たことがないとてもきれいな絵。外国のお話は知らないことを教えてくれるし、いろいろと想像するのが楽しい」と話してくれました。

奨学金を得て勉強に集中、ラオス語試験でトップに

シンペンさん／ヴィエンチャン県工科大学3年生



中等学校時代にALC奨学金を受給し、その後、技術学校に進学したシンペンさん。当会は学校での図書活動を柱とするとともに、学びそのものを支援する奨学金制度を実施しています。

「奨学生になって教科書や教材を買うことができ勉強に打ち込め、本当にうれしかった」と話します。中等学校では放課後も図書室で集中して勉強し、郡の統一テストのラオス語でトップの成績をおさめました。

今は、毎朝4時に起きてごはんの支度や掃除をしてから登校。オートバイで片道40分かかりますが、勉強のためには苦にならないとのこと。

将来の夢は家族のために家を建てること。「一人でも多く学校での勉強を続けられるように、支援を続けてほしい」と話しました。

本を授業に使ってから、先生も生徒も変わってきた

セン先生／ヒンフープ中等学校



「新しい本が入ると入口近くのコーナーに展示して、生徒たちや先生方の目に止まりやすいように工夫しています」

と話すのは、図書室担当教員として活躍するセン先生。自分で実践するだけで終わらず、研修を受けていない同僚たちみんなに図書室にある本を使うように伝えます。そこまで積極的になるのは、図書室ができて本を授業に使うようになったら、先生も生徒も変わったと実感しているから。最近では他校での研修にも呼ばれて、先生方に自らの経験を伝えました。

いかに生徒達に興味をもってもらうかは先生に共通する課題です。研修で習得した授業での図書活用の教授法も実践してみています。その結果、図書室の本を利用して授業の準備をしたり、図書室を活用する先生がふえていきました。「生徒たちの成績が上がりました」とトロフィーを指差してにっこりするセン先生です。

ご寄付のハガキや切手から4,500冊の絵本が完成!

絵本『ドデカあたまおばけ』

作・絵 アンパントーン ペップンポーン

昨年度実施した「書き損じハガキもち

よりキャンペーン2022-2023」では、508

人の方からの支援をいただき、目標を

大きく上回りました。そこで、当初予定した『ドデカあたまおばけ』の印刷冊数を3,000冊から4,500冊を増やして出版することができました。ありがとうございます。

この絵本は、夜更かししている子どもを見つけてはパクリパクリと食べるおばけのお話。子どもたちが大好きな絵本で、在庫切れになっていました。待望の再版が実現し、より多くの学校図書室に届けられるようになりました。



読み聞かせ
動画



図書室を3校で開設、27校に図書セットを届けました

学校図書室を3校で新規開催し、1校あたり500～700冊の図書を設置しました。合計1,486人の生徒が日常的に図書に親しめる機会を提供することができました。

パーボン中等学校・ケオクー中等学校 (ヴィエンチャン県)

ラオーベトナム友好モデル技術学校 (カムワン県)

また、これまでに開設した図書室のうち24校に合計2,800冊の図書を配布しました。さらに次の3校では利用をより活発にする運営面での再研修など重点的な追加支援をおこないました。

ソークカム小学校 (ヴィエンチャン都)

パークパーン小学校・サナカム小学校 (ヴィエンチャン県)

【ご支援: 福岡那の香ライオンズクラブ、愛知県立常滑高等学校、国際協力BWP愛知、積水ハウスマッチングプログラム、ベルマーク教育助成財団、国際協力団体BWP愛知】



ラオーベトナム友好モデル技術学校での開設式

特定非営利活動法人ラオスのこども

組織の理念「ラオスのこども」は、公正で平和な社会づくりに貢献することを目的として、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しながら、読書に親しむ環境をつくります。

ラオスのこども通信 87号

2024年4月発行 代表: チャンタソン・インタヴォン 編集人: 森透

発行: Action with Lao Children / Deknoylao

(認定) 特定非営利活動法人 ラオスのこども

〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303

TEL/FAX 03-3755-1603 e-mail: alctk@deknoylao.net

<https://deknoylao.net>

都営地下鉄浅草線西馬込南口下車徒歩7分

郵便振替 00140-6-462494



ラオス語絵本プロジェクト、絵本リスト改訂!

日本語の絵本にラオス語の翻訳シートを貼って、ラオスの子どもたちのもとに送るプロジェクト。多くの日本の皆様に協力いただいて、世界のさまざまな物語に接する機会を提供しています。

この度、新しい絵本の翻訳ができました。新しい絵本リストは4月中旬から公開予定です。ご希望の方はご連絡下さい。

alctk@deknoylao.net



今期、620冊の日本語絵本を学校に届けました

メコンのほとり 音

初めて触れる音色に感動

ヴァイオリニストの五嶋みどりさんが、アジアの子どもたちに音楽に触れる機会をつくりたいと活動しているミュージック・シェアリングから、2010年に続き、再度ラオスで活動をおこないたいと連絡があり、受け入れアレンジをおこないました。

ヴィエンチャン県のサカ中等学校とヒンフープの中等学校の図書館を会場に、低学年向け、高学年向けに、数回ずつ演奏が披露されました。図書館は生徒たちでいっぱい。

いわゆる西欧のクラシック音楽には触れたことがない生徒たち。ヴァイオリン、ビオラ、チェロの柔らかく優しく、そして強い音色に、最初は驚き、美しい音の流れに、次第に入り込まれ、好奇心に満ちた生き生きとした表情になっていきました。「美しい響きを体で感じてください」と生徒たちに楽器に触れさせての演奏も。生徒たちにとって新しい世界への関心を開いたことでしょう。



あわせて
[スタッフ通信]も
ご覧ください。

